

「キリスト者の生活」 一使徒行伝講解説教 6一

イザヤ書  
使徒行伝

第2章 2節～4節  
第2章43節～47節

説教 本庄侑子牧師

使徒行伝で語られるペンテコステは教会の始まりです。イエス様が復活し、天に昇り、約束にしたがい、天から聖霊がくだされました。その後、聖霊の働きにより、仲間に加わる人たちが与えられました。その集まりである教会が、現在に至るまでの神の主要な働きの場です。

最初の教会は、イエス様の死後50日後にできたエルサレム教会で、3000人以上の人がいました。そこでは病の癒しなどの奇跡が起りましたが、奇跡そのものが注目されたのではありませんでした。奇跡を通して、人々は生きて働く神にふれ、神に対する畏怖の念に打たれたのです。

「資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた」(2章45節)一見、共産主義国家における富の分配のように見えますが、彼らは、誰かに強制されて自分の財産を供出したのではありません。教会での説教を通して自分の罪を知り、洗礼を受けて教会生活を続ける中で、それまで自分のものだと思っていたものが、実は神から与えられたものだということに気づかされていったのです。お金、時間、賜物、そして人生そのものは、神のものであったのだと。

また、それに気づいた人たちは、それらを神のために用いようとしていました。自分に与えられた賜物を用いて、家族を愛し、隣り人を助けようとしたのです。他人のために自分を投げ出すかのようにも見える彼らの態度は、周囲の人たちの好意と信頼を得るようになり、多くの人たちを教会に導きました。こうして神は救われる者を仲間に加えてくださいました。

ここに、神のお建てになった教会の姿があります。奇跡の力が周りの人たちの心を動かしたのではありません。大々的な伝道プログラムがあったわけでもありません。自分中心の生き方というエゴイズムから解放された人々を通して、聖霊なる神が生きて働き、より多くの人たちがみ前に呼び集められたのです。

初代教会では、まだ礼拝の形は整わず、食事を共にする集まりの中でパンを裂くということが活動の中心となっていました。今日行われる聖餐も、イエス様が十字架につけられる前日に食事を共にしてくださったことに由来します。

イエス様はパンを取り、祝福してこれを裂き、「これはあなたたちのために裂かれる私の体である。私を記念するためこのように行いなさい」(ルカによる福音書 22章19節)として、パンを裂くようにお命じになりました。目には見えなくても、イエス様が共にいてくださることの目に見えるしるしとして、聖餐があるのです。イエス様がおっしゃった「記念」は、単なる懐かしみではなく、臨在の保証です。聖餐を通じて、イエス様をご自分の存在を保証してくださるのです。聖餐にあずかる者に対し、イエス様は「私は確かに共にいる」と保証し、ご自分と一つに結んでくださるのです。

聖餐のたびに、私たちはイエス様の声を聞き続けます。今も、私たち一人一人を通して、イエス様が生きて働いておられることに気づかされます。神によって生かされていると気づくとき、私たちも富、時間、命に執着する思いから解放されます。天から降って教会をお立てになった聖霊は、私たちの内にも働き、自由にしてくださいませ。

使徒行伝はキリスト者の生活を詳しく伝えます。キリスト者の姿や生活が、神のみ旨の実現に大きな意味をもつと聖書は語っているのです。私も、かつてあるキリスト者と出会い、その人とともに時間を過ごすことで、何か違う感覚を得ました。メリットを受けるわけでもないのに、その人は私の欠乏を補い、徹底的に関わり続けてくださいました。思い返せば、あの時私は、その人をそのようにさせるイエス・キリストを感じ取ったのだと思います。私は思いました--私もこの人のように生きたい。人を憎んだり、自分のことしか考えない醜い自分自身を終わりにしたい、と。そして、私は教会に行き、礼拝を通してイエス・キリストと出会い、今ここにいます。

教会が伝えるもっとも重要なことは、イエス・キリストの死と復活、そして再臨です。しかし、それを証拠づけるものではありません。それを信じて生きる人の姿がキリストを証するのです。私たちの生き方を通して、神がご自分をお示しになり、救われる者を仲間にお加えになるのです。

(記 説教要約奉仕者)